

---

# アルマダ！

富士堂あかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルマダ！

### 【Zコード】

Z3795Z

### 【作者名】

富士堂あかり

### 【あらすじ】

「…一般的…のはずの女子高生、椎名優はある口謎の男に渡された装置アルマダによって半ば強制的に変身してしまった。理不尽な要求をつけつけてくる飯島に怒鳴られながら優は悪の組織と戦うこと

に…

気がつけば夢中で走り出していた。いや、逃げ出していた。

雨が酷く降っていた。臭い立つ悪臭が流れて欲しいと思いつながら全力で走る。向かう当てもなく。

呼吸が思ひよに出来ない。呼吸とは、なんだつただらうか。  
思い出せない、俺は、なんだ?誰なんだ!さつきまで、はつきり分  
かってたはずだ、俺は…

景色は驚くくらい速く変わっていた。まるで他人事のように感じた。悪い夢だ、そうであつてほしい。そうでなければ困る。

何が困る?困ることなど何もないではないか。じがらみから解放されたのだ。やうか、そなのか?いや…

「嘘だ…」

通行人と目が合つた

全身が総毛立つ。やめろ、違う、違う…

それは止める　！

次の瞬間、俺の世界は再び赤に染まっていた。

何故、こんなことになってしまったのか。何故、彼女が死ななければならなかつたのか。

あいつの言った意味が漸く理解できた。これは危険だ。しかし自分ひとりではどうすることも出来ない。方法を探さなければ・・・そして終らせなくては。でなければ彼女の元にはいけない。

暗雲の中、獣は風の様に光の中を駆け抜けた。

## 0-1-\* あんパン並びヒゲ、そして

学校の床つてこりのは走る」とを前提に設けられていない。

「まつ・・・、ひら・・・、ひー・」

廊下を走ってはいけません、なんて念仏のように囁きられてるけどそれは優雅じやない、とかマナーの問題なんかじやない。とにかく滑る、危険なのだ。

普段から廊下を走つておけばよかつた、と自分の真面目さを呪つた。いや、真面目ちやんかと聞かれたら迷わずいいえ、と答えるのだけ。残念ながら寝坊の類はしないたちだ、話がずれてしまった。さしあたつての問題。過去を気にしている時間はもうさらにな!

「つたく…、ひら…、ひー…」

普通にグラウンドで走るのは違つ、上手く踏ん張れないし下手すりや転ぶ。けど今は安全に歩こてこべーとも転ぶことすら許されていない。

もし少しでもスピードを落としたら、もし転んだら……。心臓はばくばくしてて肺は裂けそうな位痛い。でも今は、とにかく走るしかないのだ。

耳立つむか二程の足の音、泡躄のようなそれを叫びながら代物が

彼女の後ろにいた。

01・あんパン並びにヒゲ、そして

「…ハ」「…」ことになつたのか、話は少しばかり遡る。

「…ハ」「…」ああ待てええッ！」

「だから待てと言われて待つ馬鹿はいませーんっ！」

デジャブではなくて、（むしろ時間軸から考えたらあつちがデジャブだと思う）私は怪物に襲われる少し前、同じようにおっさんに追い掛けられていた。

放課後、学校の前のパン屋さんで買ったあんパンを頬張りながら帰宅中、突然目の前に現れた怪しいコートのおっさんに話がある、だなんて言われ最近変質者の類が学校周辺をうろついてるという先生の話を覚えていた私は素早く反対方向の道へと走り出した…がどういつ訳だか変質者さんの琴線に触れてしまつたらしく（間違つても

罵つたりなんかしてないし）おっさんと現在こうじて追いかけっこしてゐる次第である。

けど陸部の私が全力で逃げてゐて言つのに振り切れないつてぢりいひことなの？

ちらりと罵声の聞こえる後ろを見れば鬼のよつた顔したおっさんが未だ間にこ十メートルを保ちながら迫つて来る。

「だああつーこのクソアマあー止まれつゝひつがー…」

「と、止まつたら何か…つ、はあつー確実に、ヤバい気が…つ、するじゃないですかーー！」

「お前が逃げなきやーひつちだつて、つ、走らんわー！」

「いやだから貴方が追い掛け、まつ、来るからー逃げてーるんですー！」

「じやあ今すぐ止まりやがれえええーーー！」

「お断つしまー！」

ずっとこんな感じで追いかけっこをしてる次第で。歳を考えればあちらはおっさん、果てはこちらは学生。体力勝負ならこいつちのものだと思つて校庭を二周ばかりしたその時、ガリ、と足元が揺れるを感じて私はそのまま地面にダイブしたのだった。

「あつああああああああー!？」

すしゃ、とアスファルトを数メートル滑る。

痛い、一瞬の間の後、やばい、そつ思ひのとせば同時に背中に思い切り衝撃が加わった。

「いたつーちよ、何するんですかつーどいてやれー。」

とつあえず可能な限り手足をばたつかせてみるがお腹を固定されて「うひは腹ばい。背中にいるであらつ重しづびくともしない。

「くそ……手間掛けさせやがつて……つたく、しかしいくら使える奴がないからつて女かよ……」

「はあー!? 意味わかんないんですけどーーいきなり、追っかけてきて……はあつ」

背中に変質者が乗つてゐる。想像したくもない、と皿をつむつて、開く。頭に浮かぶのは最悪のケース、変質者に捕まつた女の子は1誘拐される、2襲われる、3人身売買、4解体して内臓を売る・・・のどれがあるのはフルコース!少なくとも1と2は必須な気がするけど、どうやらここで私の人生は終つてしまつようです。折角バイトしてお金溜めてたのにな、全部使っちゃえばよかつた。

「…一週間後になつてテレビでニュースになるんですね、行方不明の高校生、白骨化して見つかるって」

「…一応言つておぐが俺はお前に用があつてこの町まで来たんだ。ついでに俺はお前に興味はさらさらないし間違つてもお前の考へてるよーな下りないとしにきたんじゃねえ」

じゃあなんだつて言うんですか、出合ひ頭に本気で追い掛けてきて、地面を転がつた女子高生に労いの言葉の一つも掛けない鬼畜な人は。勿論そんなこと言つたら何か酷いことになりそうだったので少し考えてじやあまず私の体から離れて下さー、そつ言おつとしたその時、ぐい、と力強く襟元を引っ張られた。

ちゅうど、体を起しはじめるよひ。

「！」こつ使える奴を探しに来た

やつ言つて、男は私の田の前に黒い螺旋を突き付けたのだ。

何か、具体的に形容するにはあまりにも抽象的な形だつた。

男の手からぶら下がるそれは鈍く光を吸収していた。黒く、光沢を持つたそれは金属なのだろうか。筒状のそれは折り重なつた金属やら透明なガラスを納めていて一見秩序のないちぐはぐなオブジェのよう。しかし、少女はその奇妙な内臓を納めている螺旋状の黒に目を奪われた。

黒の筋が一つ、DNA螺旋を思わせるそれに何故だか心ひかれた。

「…おい、いつまで黙つてゐる」

「ぱー」、男の呆れたような声と頭に残る緩い衝撃。頭が妙に冷静になつてざして下さい、と言つたが男が背中から離れる様子はない。

目の前の螺旋が姿を消した。

「…あつー。」

「あまり時間がないんだ。いいで話をするのは都合が悪い」

「あーもう分かりましたからざして下さいよ、腰痛になつたりざつするんですか…」

酷いです、としょぼくれたような声を上げれば男の呻くよつた声、

不本意なよつで、のろのろと背中を離れた。

少女もゆっくりと立ち上がる。少しその場に静止して不意にへるりと男の方を見た。

「全く、女子高生捕まえて馬乗りですか、重罪ですよ重罪！」

「仕方ないだろー緊急なんだよー！」

「ここ最近学校の周りで無差別に生徒に話しかけてたのは？と勢いのまま尋ねれば男が目を丸くする。少しだけしまった、とも言つ様な顔をして広まつてゐるのか、と歯切れ悪い台詞にホームルームで注意されましたよ、スカートの埃を払いながら言つと男はそれきり黙つた。

「でも私が聞いたのはマスクした男つて、あ、あとなんで他の生徒でもなく私なんですか？それとそれ！黒いの、なんなんですか、私が使えるって『だあつ！だからここで話すのは色々とまずいんだ！』……じゃあ話を聞いて差し上げますので何か斬つて下さい、ね？」

「つ、わあったよ、大人しくしてろよ……だからガキは嫌いなんだ……」

「はーい！でもこんな歳が離れてたらカップルじゃなくて親子ですね、」

「おまつ」

ドオオオオオオオッ！！

瞬間。男の表情が険しくなったのに気が付くことはなかつた。男の怒号も彼女の耳に届くことはなかつたのだ。

地響きにも似たそれ。激しい爆発音が辺りに響き渡る。

見えたのは自分と同じく呆然と目を見開く男の姿だった。

「が、学校だ…何、ばくはつ？え・・実験室かな、すいません！ち  
ょっと見できます！」

「あ、おいつ待て！」

男が再びシャツを掴んだ。なんですか、と振り向けば酷く苦々しく表情を曇らせた男。

「…」れを持つてけ

「は？」

「持つてけ！」

「は、はい…？それじゃ、ちょっと行つてきます」

腕を掴まれ強引に先ほどのそれを握らされる。真意は分からなかつたがとにかく今は学校に行かないといけない。少女は受け取つた筒

を握り締めて校門の方へと走って行つた。

そろそろと正門を通る。この時間は生徒は皆帰つてゐる時間だ。誰もいないグラウンドは西日で赤く染まつてゐる。爆発音がしたのだ、もし誰もいなければ自分が警察か何かに連絡しなければならない。音のしたであるう方を見て、言葉を失つた。

壁が壊れてる。

校庭の端、塀が一部分だけ途切れていった。白い塊が彼方に散らばつてゐる。先ほどの衝撃音はこれのせいいか、大きく空いた穴は小さな車には余る大きさ。交通事故ならそうで質が悪い。誰も怪我してないからいいものを、轢き逃げと変わらないじゃないか、と携帯を構えながらふと、言いようのない違和感。

何か変だ、と漠然に思うものの何がおかしいのか、歩み寄り、瓦礫の山、しゃがみ込んだ刹那再びの爆音に思わず叫び上がつた。

そしてその違和感の正体と原因を瞬時に理解した。

校舎の近く、コンクリートがえぐれている。そこには自分の何倍もありそうな大きな化け物が、こちらに視線を向けて立つていた。

瓦礫の山、タイヤの跡があるべき場所にあつたのは無数の窪み。否、その窪みの持ち主が今私を見る。

「うほああああああああ！」

頭が真っ白になつた。なんだあれば、なんだあれば！？

怪物と形容される以外は、葉は彼女の温かした頭の上には存在しなかつた。咆哮を響かせるその怪物は遠くで自身がここに入り込んだ所でうごめく小さな存在に気が付いたのだ。どしん、どしんと地を鳴らしながらそれはどんどん近づいてくる。

「うほあああああっ！－！－いい」所にきた、なああ、つ－何もなくて退屈じでたところ、だああつ・・・・・

・・・ひ、い、・・・いやああああアーハー

震える体を制止して校舎に向かつて走り出す。背中を向けてはダメだと直感で思った。追いかけっこなら確実に負ける。校庭の周りは高い塀で囲まれてる。登つて外に逃げ出すのも上手くいきそうにはない。かといって横に走るのも危ない。そうして彼女は一見して最も危険だと思われる方向へと走り出していた。怪物は獲物が自分から殺されにきたのだろう、赤い幾つもの目をぎらつかせて笑い出した。近づくほど奴が異常なほどでかい図体をしてこるのがひしひしと感じられた。そしてどんどん加速していることも。

そしてその時を待っていた、怪物が最も冷静さを失っている時を、自分が最も集中している時。

「つおおおおおおおおおああああ、つ……！」

今だ！少女は踏み切り、体を回転させる。大きく一步を取った。そして獣の影が自分を覆つた時に思い切り真横に体ごと飛び込んだのであった。

一瞬の出来事がコマ送りのように酷く長く感じた。上手く自身を取つて素早く立ち上がる。ちらりと横田をやれば怪物は遠ざかっている。重いものを動かすのにはより大きな力が必要る、止めるのにもそれ相応の力が必要る。加速が止めばまた一からやり直しなのだ、

「ぬ、おおおおおつー！小娘ええ、舐めやがつでえええええッー！」

「つーーー早く逃げなきゃ……いや、これ、外に出してもやっぱいつー！」

獸が再び運動を始めたのを背に感じながら考える。近くはすぐ民家だしあのデカブツがどこから来たのは分からぬが町に放すのはあまりにも危険すぎる。

自分のこの危機的半断能力を疑しながらも気が付くに核戸に向かっていた。

足音が迫っている。ローファーのまま校内に入り込む。

「つーああもうしょうがない！殺してみたけりや捕まえてみる」と  
ねこのウスノロー！女に追いつけないなんてだつさい牛さん……」

言い切るより早くひときわでかい叫び声に耳がいかれそうになる。  
さあ、もう後には引けない。尊大なネズミは命がけだ。でも、きつ  
と方法がある。そう思わずにはやつてられなかつた。

(・・・そつだ、屋上から落とそつー・せつしきみたくやれば・・・)

「おおあああああ、つーーーせつ逃げられねえ、ぞおおおつーーー

!

いくつ狭いからと書いてあなどっていた。怪物の言葉を聞くまで近

くまで来ることなんて気が付かなかつた。恐怖に足がすくみ地面に投げ出される。

怪物とにらみ合ひながら後ずさる。どすん、どすんと怪物が進む。

壁に触れながら、手が沈む。人一人入れるくらいの狭い横道。確かに建設の時間違つて作っちゃつたとか・・たまに馬鹿な男子たちが入つて遊んでいるのを見たことがある。

少しでも長く生き延びたかったからであろうか、怪物の終わりだ、といふ台詞を聞いた瞬間そこに入り込んでいた。三メートルくらいある。胸が聞えたがなんとか奥に入り込む。

「ぐへへっ、本当にネズミみえだなあ・・・」

「・・・」

だが後は詰めてくだけだ。怪物は悪臭を放ちながら叫び、唾液を飛ばしながらその狭い穴を広げていく。がりがりとコンクリートを崩していく音、すれすれ今まで迫つている獣の腕。

もう何処にも逃げられないではないか、どうして私なの。何も悪いことなんかしてないじゃないか。

さようなら、色々とじめんなさい、にじみかけた涙を堪えて崩れそうになる、刹那。

機械の音がした。

時間が止まったような、それくらいその音は私の頭の中ではっきりと聞こえた。

走馬灯のようなものか、はたまたそれが文字通り私の頭に響いたものなのか、とにかく私は何が起きたか分からなかつた。片足がおかしい。膝より少し上から何か機械のようなもので覆われている。これはまるで…

「お、んなあああ、つ！ぶつ殺してやる、ひひひひーー。」

「つー」

選択肢など存在しなかつた。

力の限り足を振り上げたのと時を同じくして物凄い衝撃に私は壁に打ち付けられた。

## 02\* アルマダ、或いは不法侵入

今日一番の衝撃だ、と煙の沈み始めた頃に立ち上がって外へと顔を出した。

廊下は窪地から放射状に爪あとを刻んでいた。怪物が受け止めたからかあまり被害は大きくなかったが。

ぐつたりと地面に倒れこんだ様子を見るとさつきの衝撃で伸びてしまつたらしい。死んだのかどうかは分からぬしあまり近くに居たくはなかつたので伸びていてのを確認し颯爽とその場を立ち去った。学校にいた理由は分からぬがあの分じゃ退屈しきだつたと思える。

大きな牛の角に無数の赤い目、体躯は数メートル、異常に強い力を持つてゐる。あまり頭はよくないようだがんなんものを野放しにしていられる筈がない。

そして自分の身に起きたことも、だ。化け物をノックアウトしたあの現象。何が起きたかよくなかったが、とにかく私の身にも不可解なことが起こっている。

あまりにもいつぺんに不可解なことが起き過ぎてどうしたらいいか、そんな悩みは疲れと空氣を読まずに鳴るお腹の音で一遍に吹っ飛んでいった。

「ふーつ、つ、か、れ、たあー」

これじや明日は全身筋肉痛だな、と暖かい湯につかりながら思い切り体を伸ばす。食べた後すぐお風呂に入ると消化によくないって聞いたことがあるけど知ったものか、とにかく今日は疲れた。薄緑色の湯に体を沈めていく。息が泡となつて波面を揺らす。溜息をつく、今だ頭はショートしたままだ。

「明日も学校だけどどうなるんだろ？……地方紙に載るくらいのニュースだよね、警察も来るのかな……ってかあれ、伸びたまま置いてきちゃつたけど大丈夫かな……なんか不安になつてきた……」

「……ってか冷静に考えればなんでさつさと逃げなかつたんだろ……・鬪牛士じゃないんだから」

「けどなーんで私のほかに誰もいなかつたんだろ……あーもう、なんかむかつく」

入浴剤の甘い香りが鼻をくすぐる。とにかく今日は早く寝よつ。こんな変なことがあつて溜まるか。よくよく考えれば不可解なことが多すぎる。きっと夢に違いない、それならばそろそろ覚めてもいい時間だ。そうでなければ別の夢にこんにちは、悪夢は記憶の彼方になる、はず

「残念ながら夢オチじゃねーからな

がらりと窓が開いて夕方の男が再び登場した。

『気が付けば男の頭はぐしゃぐしゃになっていた。自分の手には桶である。

誰がどうみても私が水をぶつけた以外説明しないだろ？。濡れ鼠になつた男は怒つているのか、呆れているのか、微妙な表情。

「……お前なあ……！」

「いやいやいやおかしいでしょー何処の世界に女子の入浴シーンに生真面目な顔して入つてくる馬鹿がいるんですか！のびた君か！」

「だからガキに興味はないいつつただろ馬鹿が！追いかけつこの次は水か、あの後お前帰つてこなかつただろ、だから心配してやつたつづーのに……」

なんで私の家の住所知つて、と零せば大人の世界には色々ある、と謎の台詞で濁される。この人、やっぱり危ない感じの人っぽいな、と男を睨んだ。

いくら興味ない、って言われても見られるのは癪だ、そう思い立ち上がつて窓に手を掛ければ冷たい風に身震いする。

「俺の気持ちが分かつたか

「寒い……」

「うちは倍さみーんだよーとにかくあの後どうした学校は何もな

かつたのか？」

「えつ、それは・・あの・・・」

「？」

びついたって、やつロヒして涙が出てきた。怖がつて泣く暇なんて無かつたのだから。

男のうろたえる声が聞こえた気がしたが時間遅れの涙は止まらず、ぐずぐずになりながら怖かつたです、となんとか言葉にした。のぞきじやない、と風呂場までやつてきたそのどこからビリ見ても怪しい男はどういう訳か、濡れた髪を黙つて撫でていた。本当は優しい人なのかも知れない、まだ、よく分からぬけど。

「・・・・つ、すみません、風邪、引いてやりますよね」

「・・・・お前が無理そつなら、少しは待つてやるが」

「あの、話、するつて、言つたじやないですか・・部屋、一階なんで上で待つててください。すぐ、あがりますから・・・」

「・・・・ちよ、」

「窓の開いてる方です、とりあえず、少し聞かせてください・・・・もひ、訳が分からなくて」

「いや・・・すまん、ちよつと」

「?あ、タオル欲しいですか。い、今持つてきます・・・・」

そうじやなくて、壁を登つていけってことなのか、と渋い顔で言わ  
れてああ、と少女は声を漏らしたのだった。

「わし、とタオルを被つた男が言った。

「その様子じや実際に見たよだから説明できる」とは説明するが、  
よく帰つてこれたな」

「あれは・・・一体、なんなんですか」

あの時校庭で見た怪物。ありえない、と先ほどまで否定してた自分がいたはずなのに。

男は唸つて、顎を擦つた。

「一言で言つと難しいが・・・名前は分からん。正体も知れたもんじゃねえが・・・とにかくあれば、いや、あいつらは紛れも無い怪物で楽しみで人を殺しちまうよーな奴らだ、まともなもんじゃねえ」

「・・・あいつらついてはあの牛以外にもいるってことですか」

「残念ながら敵は軍団だ。数日前この町に来てるつータレゴミを貰つた「ちょっと待つて！それ、他にも協力者がいるってことですか？」・・・まあ、協力者といえばそうかな。あいつらを止めるために協力してくれてる仲間はいる・・・がこうやって俺みたいに

実際に動いてる奴はいない」

確かに、あれと面と向かつて戦おうなんて思つ人はいないと思える。私だつてもうあんなの近くにすら行きたくはないのだ。

「ところでお前に渡した奴。あれちゃんと持つてるか?」

「え、ああ・・・! そうだ、あの、私、あれに追つかれられてるときにいきなり、機械? みたいなのが・・・よく分からんんですけど足が変化して」

少女のたどたどしい説明に男は目を丸くした。驚き、そしてそれは感心したようなそれへと変化していった。

「せうか、いや見立て通りといえばそうだが・・まさか使い方も教えずに発動させるとは・・・」

「ちよ、ちよっと一やつぱりあれ、これのせいなんですか? いきなりの」と、よく

「それは足だけ、か?」

言葉を遮られる。そうです、と一言返せばやつてみる、と差し出したそれを付き返される。やつてみる? どうしてああなつたかも分かつていよいよ自分が何を言つてるのだろうか。この人は無理をいいすぎなんじやないか、と恨めしげに見ていれば気が付いたのか、渋い顔をされて、気合を入れてみる、とまたまた無茶な質問。

「あー・・お前、なんかスポーツやってんだろ、その時に、なんでもいいから集中するために毎回やつてることとかないか。それがな

ければ目を閉じてそれに同調するよつた意識を集中しり、「

「無茶ばかり・・・・いきますよ、あ、失敗しても何も言わないでくださいね。つーかやり方知ってるならさつと教えてくれたつていいのに」

黙つて集中しる、と男が言ひ。ゆつくりと目を閉じて掌のそれに集中する。冷たくて、不思議な感触だ。握り締めて、掌の感覚に集中する。暖かくなつてる気がする。いや、確かに熱い。

熱くはなつてゐるが、あのときどうやって変身したかなんて覚えてない。何も変な感じはしていない。部屋の中は沈黙に包まれていてこちらを見ているであらう男の視線を想像してむずがゆく感じた。もういいですか、無理そつ、と返事も聞かないで目を開けて、不敵に笑う男の顔と・・・そして体を覆う違和感に私の世界は再び時を止めた。

体中を何かが覆つてゐる。視力は悪くないほうだがよくくつきりしている。マスクのようなものを被つていて中からではよく分からないうが、恐る恐る掌を上げればあの時見たそれにそつくりの一本のグローブに覆われた腕が視界に入つていた。

「どうだ、初めて変身した気分は」

「え・・これ、私、今どうなつてゐんですか、何これ!」

「落ち着け。あんまり暴れると床が抜けるぞ!しかし、くく、これが偶然じゃないことはなかなかいいじゃないか!!いいか、椎名、今お前の体はアルマダで強化されてる。俺たちが持つ最大の力を持つたそれにな!アルマダは単なるオブジェじゃない・・・対怪物用のボディースーツだ。そして・・・まあみてみりや分かるが、お

前は「」いつを使える数少ない適応者

「ちよ、つまり……私はこれで、怪物を倒したってことですか。これ、あの、私、変身ヒーローの類に変身してるってことですかあ……？」

「わうだ、ま、あんなちやちなもんじゃないが……とにかくお前さんにここれから俺に協力してあの怪物たちと戦つて貰う。被害が出る前に食い止めるのが俺達の仕事だ、いいか？」

アルマダ、と男が言った。この筒の名前だろうか。

掌から筒は消えていた。腰のベルトに筒だったものが電子光を放ちながらついている。

もし断つたら、その言葉に男は言ひ。お前が想像できる最悪のケースになる、と。

戸惑つた、しかし、断れる気がしなかつた。ゆっくりと頭を縦に振ればにやつと笑つて男が掌を差し出す。

「俺の名前は飯島英一、お前のサポートをしてやる。お前も……応名乗つとかなきや気持ち悪いだろ？」

「……しいな、椎名優です」

「よし、それじゃあこれからよひじへ頼むぞ」

「が、頑張ります……飯島さん、よろしくおねがいします」

「ちよと待て、ちよと怪物を倒したつたよな」

飯島さんの視線が痛い。何かまずいことを言つただろつが。だから

キックしたら気絶しちゃいました、そういうときった瞬間飯島さんのグーパンが私の頭」とマスクを揺らしたのであった。

「ひ、酷いです飯島さん……こきなり、ぶつなんてつ…」

「ひるせえ……どうして止めを刺さなかつたんだよつーまさか学校においてきたのか……今すぐ行くぞ!」

「え、もうパジャマなんですかび……『口答えすんじやねええええええ!』……ひこつーわ、分かりましたあ……つー」

残念ながら私のお話はこれからだつたようです。女の子はスカートを履いた魔法少女になるものだと思っていたのですがどうやら私の場合は違うようで、少し怖いおじさんと言われるまま

残念ながら学校はぼうぼうのまま怪物の姿はなかつた。私は正直よかつたと思ってるけどまたグーパンを食らつたのは不本意でしたけど。とにかく本当にこれが始まりのようです。私、今日からヒーローになりました。

何処の暗闇か、だだつ広く何にもない場所がそこにはあつた。いや、何も無い、といつのは少々語弊がある。その、酷く暗い空間の中、それは居た。

「随分と見苦しい真似をしてしまったね」

部屋の中、ひときわでかい団体のそれに向かつて男が言つた。毛む

くじゅらの体からは立派な角が生えているが、酷く汚れている。ところどころ血が滲んでいて、彼の体臭と交わって、酷い悪臭を放っていた。

「うひ、うひ、こきなつのことで、ぐひひ」

「やはり貴方を自由にするのは間違いのようですね……現段階ではなるべく事は隠密に、と閣下の命令です。次失敗したらどうなるか……クククッ」

男の笑い声にびっくりと毛の塊が怯える。体躯の差は明らかなのに、獣は見るからに怯えていた。男の笑い声に釣られて他の笑い声が混じる。其中で一人、腕を組んで一部始終を見てる別の男が居た。

「ギルスティン、ピークを責めるな。ピークも悪趣味なことばかりやつてるからそつなるのだ、遊びでやつてるんではない」

其の言葉に獣は再び身を縮こませる。先ほどまでそれを誇っていた男は、さきと首を回して大げさに手を広げてそうして暗がりに向かつて歩みを進めた。

「おつと、私はその点に関しては貴方に賛同は出来ませんね。堅物のオウズウェル殿、少しなりとも楽しんではよいではありませんか・・?」

「・・・やりたければ勝手にやれ、私は責任は取らんからな」

獣は男が暗闇の中で消えるまでじっと見ていた。瞳に怯えの念はなかつた。かわりにそこには獲物を見たときに見せるぎらぎらとした赤黒い意志があった。

「ぜつだいに・・・・次はぶつ殺しでやるわ。・・・・ーー。」

次は期待している、そういうも既に外の音など聞こえていないようだ。ずんずんと少しふるさこ音を立てながらピークもまた暗がりへと消えた。

考える、奴を好き勝手させたのは確かに失敗であつた……が、ビーコンを一撃で倒した者とは一体何者なのであらうか。今まで自分達にまともに反抗できたものなど皆無と言つていい。恐らく不意をつかれたのであらうがしかし、放つて置いていい案件ではなさそうである。計画の邪魔になる可能性はなるべく早く消したほうがいい。

早急に手を打たねば、と男は重い闇の中へと姿を消した。

「ん・・・んー、う?・・・「ーん・・」

目覚めはあまりいいものではなかつた。体中妙に痛い。そういうえば、と優は昨日のことを思い出してああ、と一人納得したように息を漏らす。恐る恐る枕元を見れば今までなかつたそれが優の目にに入った。アルマダ、と飯島さんは言つてた。このなんだかよく分からぬものせいで昨日は散々な目にあつたのだ、いや、もしあの時これがなかつたら今頃どうなつていたかは分からぬが・・・。とにかく優にとつて重要なことが昨日のこと、変質者だと噂されてた男からこれを受け取り、学校で怪物に襲われ、そして命がけで退治したこと、それらが全て夢じやなかつたといふことだけだ。

あの怒涛の出来事から昨日の今日、今日くらいはゆっくり朝寝坊したい気分であつたがタイミングよく一階から母親の呼ぶ声が聞こえてしまつたのでしぶしぶ布団から這い出て、ふと、枕もとのそれを手に取り姿見の前に立つ。目の前にはぐぢやぐぢやの髪でだるそうにしてる自分がいる。優は緩慢な動きで手を伸ばし、言つた。

「ぐ、へんしーん・・・」

彼女だけだるげな言葉に対しそれは昨日と同じくちがひと奇妙な音を立て鏡に映つた自分の姿を変えた。変身ヒーローとはよくいつたものだが、言つなればこれは仮面ライダーつて奴に似てる。話はそんなにじらないけど、なんとかレンジャーみたいなのよつはそつち寄りだ。

でも普通、女だったらひらひらのスカートと魔法の杖なんじゃないだろうか。いや、あんな恥ずかしい格好出来る木はしないけど・・・

だからといって男の子の憧れるようなヒーローがいいわけじゃない。科学的な21世紀、実用性で見ればこっちのがいいのかもしないけど。

「どうみても中に入ってるのが女だとは見えないよね・・・」

自分の身長を呪つた。確かにでかいほうだけど、そんな時なかなか降りてこない母親が痺れを切らしたのか先ほどよりも大きな声でご飯、と催促する言葉が耳に入つて優は慌てて部屋を飛び出しだった。

### 03・監視者と覚醒（前編）

あまり期待はしてなかつたのだが学校はやはり昨晩のままだつた。夜遅くに飯島と学校に忍び込んだ優には閉められた校門も、沢山のパトカーも、いたるところに張られた危険立ち入り禁止、と書かれた黄色いテープもそこまで驚くほどのものではなかつた。

とはいえ校門の前でたむろする野次馬はなかなか凄い、他の生徒よろしく優もその集団の中に頭を埋めて人を搔き分け校門のところまで踊り出る。先生の帰りなさい、という言葉や生徒の面白がる声、その中に例の変質者のせいだ、という言葉が聞こえた気がした。飯島さんがやつたのだつたらまだマシだつただろう、いや、たちの悪いのに変わりはないけどさ。

ひとまずこれで今日は休校だ、そう思つて集団から抜け出したとき、ペシリと何かに頭を叩かれてああ、と優はその男を見上げて言った。

「おはよ、先輩」

「随分呑氣だな、お前学校見たのか？」

呆れたように男がそう言つ。周りの人たちと同じように制服を来たその青年、名前を皆川敬といい優と同じ口野高に通う高三だ。家が隣、そうなればそれなりのお付き合いをする訳で家ぐるみのお付き合い、所謂幼馴染という奴なのだがこれが勉強スポーツなんでも出来ておまけに結構な男前なのである。長く付き合つてるのだ、別に異性として好き、とかそんなのはないけど、まあ自慢のお隣さんだ。

「だつてあんな人いたらよく見えないし・・・先輩は知つてるの？ 中のこと」

「え、いや・・俺も詳しくは知らないけどなんでも凄いらしいぞ、トラックが突っ込んだみたいな、あと校舎の中も酷いって」

ふうん、となるべく自然に相槌を打つ。実情を知つてるだけに辛い。トラックじゃなくて大きな牛の怪物なのだと漏らしてしまいたい気分だったがそんな夢みたいな話、何も知らないということにしどけというのが飯島さんの命令だ。取調べとか受けたくないし。話を逸らすためにもう帰る？と振つてみると敬は少し妙な顔をして、

「お前、今日は珍しく大人しいのな」

「何が？」

「いつもはこりうの喜んで頭突つ込むだろ」

「え、だつて・・その、トラックがつっこんだんでしょう、それなら

別に

ああ、その視線が痛い。このまま下手に言い訳するのはあまり得策じゃない、とだつて学校休みだし、そう言つて敬の前を行くよう歩き出せば全く、と呆れるような声。とりあえず撒いた、と妙な確信をしてそのまましぶしぶと言つた様子で付いてくる敬の数歩先を行きながら帰路に着く。

「なあ優、」

「何? どうか寄つてく?」

「あのや・・あんま変なとこひづりするなよ。お前いつも何かやらかすだろ、最近物騒だし、人のいないとか夜一人で出歩いたりするなよ」

「なんで敬ちゃんがそんなこと言つのよ、先生じゃあるまいし」

それは、言いかけてそれきり敬は黙つた。そんなに危なつかしいのだろうか、心配してくれるのは嫌なわけではない、けど一番守れそうにないことだ。その物騒なものと戦わなくちゃいけない。ありがとう、と照れくさくなりながらもそう返せば困つたように笑う敬がいて心の中であつとじめんね、と謝つた。

「ここの町には高い建物が全然ありませんね・・・」

小さく蠢く人たちを見下ろして奇妙ないでたちの男がそう言う。眼下では小さな虫けら共が必死に我々の跡を探している。あいにくと物を直す力を持った者はいないのだが別段知られて困るレベルのものではない。言葉を向けられたであろう男は崩れたコンクリートの山を睨み付けていた。

「・・・オウズウェル様? いかがなされましたか」

オウズウェルと呼ばれた男はいや、と踵を返す。突風が吹きぱさりとボルドーのマントが風に煽られ男の姿を太陽の下に晒す。暗褐色の体は硬質の殻に覆われ銳い爪は簡単に人間の肉などいとも簡単に裂けてしまいそうだつた。肉の甲冑を着込んだそれは重たげな見た目に反し酷く静かだつた。一緒にいた男は畏まつて地べたに膝をついた。

「エイダオース、お前ならばこの町をどう攻略する?」

「は・・・そ、それは私めに任務を、といつ意味で『ございましょうか・・・』

「たとえばの話だ。しかし・・・うむ、一度お前に一任するのもよいだろう。しかし事は隠密に、との閣下のご命令だ。ビーグのような愚かな真似は許されないぞ・・・ネズミがいるかもしれない、十分気をつけるのだ」

しかしネズミ、とエイダオースは返した。我々に逆らう分子など存在しようがない。ビーグの噂はエイダオースの耳にも入っていたがビーグは見た目どおりの奴だ、油断や慢心が引き起こしたに違いない。下手したらこけて頭を打つだけで言い訳としてその幻を作り出したのかもしれない。とにかくビーグのことだ、そう深く考える

必要はない。樂觀視しているエイダオースに反し、オウズウェルは渋い顔をするばかりだ。

「エイダオース・・お前なら肉を集めるのもたやすいだらう。そして万が一にもそのネズミの足取りが掴めたら殺してしまつて構わん。好きなようにやれ」

好きなように、その言葉にエイダオースの体が僅かに揺れた。

「たとえどれほど微弱な可能性であろうと闇下の邪魔となる存在は許しておけん。さあゆくのだエイダオース」

仰せのままに、下卑た笑いを浮かべてエイダオースは町のほうへと向かつ。

「・・・私のせいだといいが・・」

残された男はそういう残して闇に消えたのだった。

「で、なーんでもまた飯島さんがいるんですか」

立派な不法侵入罪ですよ、来るなら来るで電話でもメールでも寄越してくださいよ、と彼女は部屋の入り口に立つてうんざりしたようになぞ言い放つた。窓を開けっぱなしにしてくとお前が悪い、と悪びれもせず言ひ飯島に返す言葉も思い浮かばないので鞄を投げてベッドに腰を下ろした。

「てか何でこんな時間に・・・あ、狙いは下着ですか、やだ飯島さん  
のHッチ」

「違え！だから・・・いや、ちつとい。あの分じゃ授業なんてやつ  
てられねえだろ。いや、帰つてこなくても待つてる予定だつたが・・  
・「あの、いちおー私、年頃の女の子なんですが、とにかくこっち  
ものろのろしてられねえ。見回りすんぞ、嗅ぎ回つてる奴が見つか  
るかもしれねえ」

この人は人の話を遮るのが好きらしい、優は暫く飯島をじつと見て、  
はあ、と大きく溜息を吐いた。

「普通いつこいつ曰つて自宅でおとなしく勉強する曰だと思つんで  
すけど」

「まともに家にこる奴なんているわけないだろ準備できたら行くぞ

拒否権なしな訳ね、ひとでなし、と呴けば聞こえてたらしくぱーん  
と頭上に鉄拳が飛んだのだつた。

制服のままつらつらするのはまasyい、とのことで私服に着替えて町  
を歩き回っている一人だったが昨日の今日のこと。別段変わった様  
子も怪しいところもない。

「ね、飯島さん」

「なんだ」

「本当にあてもないんですね」

「あてがあれば苦労はしないぞ。最近の若い奴はそつもつてすぐ結果に走る。お前忍耐力ないだろ」

失礼な、と優が拗ねたように睨み返す。繁華街をこづしてうるついでる訳だが怪しいところとかいつもと違うところなんて全然ない。

「・・・あの、飯島さん」

「もしこの先またあんなのと戦うことになつたらテレビみたいに敵の前で変身しちゃつていい『訳ないだろ』・・・ですよね」

「一応責任者だから言つておくが敵に正体がばれて困るのはお前だけじゃないんだよ、俺が敵だつたらお前を消すためにはどうすればいいか分かるか。お前は家族や友達を人質に取られてもいいのか」

現実とフィクションを混同するな、ペシリと頭を叩かれて飯島が先をゆく。商店街を抜けてすぐ、大きな公園がある。そういえば小さい頃はよくここで友達と追いかけっこやら砂遊びやら一日中遊んでいた気がする。中学に入った頃には自然と足が遠のいてしまったが。なんとなく、足がそちらに向ぐ。飯島さんもそちらに行く気がつたらしく何も言わない。

「子供だからかと思つてましたけど、結構大きいですね、ここ」

「ん？ああ・・・確かにでかいな」

思い出はおぼろげで、こんなのがつたつけ、と優が見て回る。時間のせいか小さな子供をつれた母親が沢山居た。いたつて平和、優は正直このあてもない探索に飽き飽きしてたので思い出を確かめるよう二つ一つ見て回った。飯島は自分達が場に不釣合になことを感じて居心地が悪そうに見えた。

「おい、他のところ見るが」

「まあここからは人もいっぽいいますしもう少し奥見ましょうよ、向こう木とかいっぽいありますよ」

「ああ・・・・・とすまん、ちょっとトイレにいってくわ」

えー、とわざとらしく言つ優ににらみを利かせて黙らせる。私は遠慮します、先に行つてますからさしあと済ましてきてくださいね、そう言って公衆トイレから離れた。

遊具のある広場から少し先、小高い山のようになつたそこは雑木林が幅を利かせていて木漏れ日がきらきらと光つてゐる。暗くなると結構怖いんだよね、とまだ青みを残したはっぱのヴァールを眺めながらゆづくりと歩く。

ふと足元を見れば、どこもかしこも植物の芽で覆われてる。長いこじこに立ち寄ることはなかつたが、こんなに葉っぱだらけだつただろうか？見なれない種類の葉だつた。でたばかりの芽からは妙に長い弦が地面に向かつて伸びていた。

「おねーちゃん、何してるの？」

その時、自分を見上げる少年の存在に気づく。腕白そうな少年はこの時間には見慣れない存在に興味を引かれたのか、ぐるぐると優の周りを回つた。探検ごつこだよ、と人差し指を立てて田線を合わせてやれば目を輝かせて僕も、とねだつた。

「何、さがしてるの？」

「んふふー何かな、何が欲しい？」

「んん・・・なんだろ、わかんないや」

私も知らないの、と優はあっけらかんとして言つ。今日はこのまま見回りはやめてもう少し少年につきあつてあげるか、そう思いながら歩いていく優は、視線が下に下がっていた為か、地面を覆う芽が夥しい量になつているのに気が付いた。芽は数を増し、大きく、太くなつていて。その時、植物が恐ろしいスピードで生長してゆき

「ダメーっ……！」

とつさの行動だった。少年を突き飛ばしたのはよかつたが、急激に大きくなつた弦が腕に絡みついた。突然の衝撃に呆然とした様子の子供だつたが目の前の異様な光景にわッと泣き出した。植物は尚も異常なスピードで伸びてゆき気が付けばいたるところに絡み付いて動けない。植物がコンクリートを割つて芽を出したなんて話を聞いたことがあるがそんなものではなかつた。泣き叫ぶ少年に逃げて、力の限り叫べばぐちやぐちやの田でこちらを見て走り出した。よかつた、そう安堵するもさしあつての問題、飯島さんはこんな時何してゐるんだ、となんとか腕を動かして携帯に手をかける。

電話帳を開き、発信を押した刹那、今まで絡みつくばかりだった薦が思い切り手を叩いた。

「ああっ！－！」

弧を描き、そして植物だけの地面を滑る携帯。

「困るんだよねやつこいつ」とされると

「－」

背筋に悪寒が走った。声が、自分の真後ろから聞こえる。やはり何か居る、無意識に身を硬くしていた。

「残念だがこれでお讓ちゃんが助かる方法はなくなつた・・・警察か？だが到着する頃にはもつこいには誰も、いない！」

声が強くなる、それと同じく体に絡みつく力も大きくなり息が苦しい。頭の中は恐怖で一杯だつた。このままでは変身する前にやられてしまつ。一度これから逃れなければ、しかしじうしようもないではないかー背後に居るであろう男は姿を見せる」ともなく続ける。

「非常に困るんだ、オウズウェル様がわざわざ私に任せてくれたつた任務、邪魔されたら非常に困る・・・」

「あああっ・・・つづく・・・－！」

「ふふ・・・・痛いか？苦しいか？ガキと違つてお前はモルモットにはならないが、折角若くて可愛い女が手に入ったんだ、少しくらい楽しんだつて任務に支障はないだろう？」

がぱりと植物の薦をまとめたような、そんな腕が背後から現れ優の体に触れた。しるしると蛇のように蠢く薦が太ももをなで上げる。悪寒がした。正氣の沙汰と思えるわけがなかつた。

「や・・やめて・・・・・」

「そりだ、もつと泣き叫べ・・・・・！いくら声を上げたって誰も助けにはこないのだからなーーーッハツハツハ・・・・・！」

せめて一瞬でも薦の力が緩まれば、もはやここで終わりなのだろうか、

諦めかけたその時、木の陰から何かが飛んできて。

「つー？な・・・・・つわああああつ！・・・」

どん、と何か鈍い音がして薦が緩む。振り返つて優はそれが飯島自身だったことを理解した。捨て身の攻撃だ、私は逃げられるが危険が増す。吹つ飛ばされた怪物はこの間ほど大きくなかったがこちらの植物全部が体だと思える。

「てめー何女子供狙つてんだ？」

飯島さん！優は呆然とする。お前は早く逃げろ、と地面に倒れた飯島の言葉にはつとしてすぐに走り出した。

変身して戦わなければ、飯島さんが、子供たちが危ないと・・・

飯島たちが見えなくなるまで走つた、誰も居ないことを確認してアルマダに手をかける。気合入れろ、そう強く念じて思い切りそれを突き上げた。

「変身つい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3795z/>

---

アルマダ！

2011年12月17日19時50分発行